

社会教育としての日本語教育の試み

—國立教育廣播電台「早安日語」での実践—

SUN Yin-hua/孫寅華

Tamkang univ. Department of Japanese/淡江大學日文系 副教授

【摘要】

2002 年 2 月起接下國立教育廣播電台日語講座課程至今已屆 3 年。由當初純粹基於熱愛廣播到目前正視並省思學校教育以外日語教學之功能，更希望經由筆者之實際經驗分析媒體教學之面相，找尋出與社會教育的接點，進而拓展教學視野，提升教學品質以及效果。

【Abstract】

It's been three years from Feb, 2002 that I took charge of Japanese Language Lecture Class for National Education Radio. At first, I was just being keen on broadcasting, but later I started to notice it's important to examine the school education nowadays. I hope I can find out connections between schools and the possibilities of Japanese language teaching by experiences on media teaching. It can be helpful to wider the field of view of language teaching and raise up the quality of teaching to make it more effective.

【關鍵詞】

廣播電台，媒體教學，社會教育，接點，

1. はじめに

台湾の日本語教育が飛躍期¹を迎えるようになった 1989～1996 年の間に、文化や貿易など様々な面において日本との頻繁な接触が行なわれるようになったことにより、台湾では、それまで英語塾ばかりだった町並みもいつの間にか一変して、「英・日」が並列するようになった。台湾では、1990 年代に日本語学習ブームが起こったのである。また、1993 年から実施された「大学課程標準修訂委員会」による「大一外文」には英語のほか、日本語やドイツ語、フランス語、スペイン語なども取り入れるようになったことで、従来の「大一英語」にかわって、各外国語を履修することが可能である多元化した「大一外文」がまさに主流になったのである。一方、各高校では教育部が（日本の文部省に相当）1995 年に「高級中学課程標準」を公布し、英語以外の外国語も早いうちに取り入れようという政策を打ち出して以来、日本語は選択科目の一つとして加えられた。これらのことも拍車となり、「哈日族」という流行語も出てくるようになるほど、台湾では、日本語学習が盛んになったのである。

『台湾における日本教育事情調査 平成 15 年度』によると、台湾の日本語学習者は 128,641 人にのぼる。そのうち、普通高校の第二外国語として学ぶ学生数は 22,221 人で、全体の 17%強を占めている²。が、こう言った数字には調査範囲に含まれた大学日本語学科、大学や高校での第二外国語、そして塾などでの学習者の数しか見ることができない。実際に、メディアを通して独学している学習者の数は多く、中でも、ラジオ放送による学習者の人数は少なくないと思われる³。

ラジオ放送とは、マイクに向かい、電波を通してほぼ独り言のようなメッセージを不特定の相手に伝えるものだと思われ、筆者はイメージしていた。おそらく誰もがそう思っているのではないだろうか。ところが、2002 年の 2 月から筆者が国立教育ラジオ放送（国立教育廣播電台）の日本語講座を開いてから今日に至るまでの 3 年半の間、実際、筆者自身が現場でラジオ放送を行って来て、ラジオ講座というものは、学校教育や塾での外国語教育とは

¹ 蔡茂豊 『台湾日本語教育の史的研究 下』P 42を参照

² 財団法人交流協会の調査による。

http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_contents.nsf/06/ED97926AA7BC824649256F430025B77D?OpenDocument

³ 人数の統計は無理なため実際に集計されたデータはないが、リスナーからの電話や、膨大な量の手紙やファックスなどにより、だいたいの視聴者数がわかる。

違った形式での確かな日本語教育の一環であるという点を見直すべきであると思いつくようになるようになった。

本稿は筆者がラジオ放送を始めてからの 3 年余りの講座内容と視聴者からの反響を例に挙げ、社会教育の面からラジオ放送での日本語教育の効果を検討してみたい。そして、今後の台湾での日本語教育の一側面としての課題を示しながら、社会教育の面で、台湾の日本語教育の多様化と重層化にあたってのもう一つの選択肢としての役割を提示していきたい。

2. ラジオ放送日本語講座—「早安日語」をめぐる—

2.1 講座開始のきっかけ

國立教育廣播電台が 2002 年度から F M チャンネルに日本語講座を加えようとあたらしい番組の企画を打ち出した。その後の 2001 年 10 月、講師募集が行われた。筆者がそれに応じ、選考委員会を通して白羽の矢が立ったのである。

12 月に番組の司会、抜擢の知らせを受け取ったと同時に、翌年（2002 年）2 月 16 日から本格的な番組が始まるということもわかって、すぐさま内容製作に取り組んだその当時のあわただしい有様は、いまでも鮮明に覚えている。このようなときに、筆者も製作に携わった淡江大學「核心日文」⁴の新版教材がチームワークによって、出来上がっていたので、今まで第二外国語として勉強している日本語学習者に使っていた旧版（1998 年出版）「核心日文」をラジオ放送の教材にまわしたら、とアドバイスしていただいたのは当時学科主任の劉長輝氏である。理由としては、第一に、教材の実施対象は非日本語専攻の学習者であること、第二に、両者ともに初心者であることである。

こうして、準備作業の段取りが決まったわけである。その一方、ラジオ放送局と一年契約のつもりで、授業の目安を初級終盤の段階に置くことにしていたため、これ以上先のことをまったく考えずに放送一年間を目指して集中していた。ところが、番組が始まって半年がたったとき、「来年も続けてほしい」と放送局から依頼され、筆者は急にラジオ放送とは教室の壁を越え、違った形式の教育の働きを有しているということに気づいたのである。

⁴ 筆者の勤める淡江大學では 1993 年より第二外国語としての日本語を「核心日語」と呼び、統一教材を使用することにした。本稿は便宜上その教材を「核心日文」とした。

通信教育の本当の意味はどこにあるか、日本語教育においてどう位置づけられるべきかというようなことを、このときになって初めて、真剣に考えるようになった。つまり、この日本語講座を引き続き継続することが決定すると、新しいコースのデザイン、教材の想定などに直面し、見直す必要性が出てきたということである。

2.2 「早安日語」内容の構成

2002 年ラジオ講座をはじめてから、2005 年の現在まで、三つの段階に分け、それぞれの段階について、以下、述べていくことにする。以下、表 1 に三つの段階について、示した。「早安日語」は朝 6 時から 6 時 30 分まで毎日 30 分の日本語講座である。

表 1「早安日語」の内容構成

段階別	講義期間	内容	教材名
I 日本語入門	2002 年 2 月 16 日 ～ 2002 年 11 月	20 課から構成 (1～114 講)	淡 江 大 学 (1998 年)「核 心日文」致良出 版社
II 初級から中級へ	2002 年 11 月～ 2003 年 7 月 (上) 2004 年 4 月～ 2005 年 3 月 (下)	25 課から構成 上 12 課 (115～205 講) 下 13 課 (206～331 講)	孫 寅 華 総 策 画 (2003 年)「お はよう日本語」上 ・下 致良出版 社
III 中級から上級へ	2005 年 9 月 2 日～ (上・下各 1 年間の 予定)	25 課から構成 上 13 課 (1 講～) 下 12 課	孫 寅 華 総 策 画 (2006 年)「イ ンカ説故事ーお もしろい昔話」致 良出版社

「早安日語」の内容は、以上の表 1 のように、現在まで、放送内容の変化に従って、大きく三期に分かれる。

まず、2002 年 2 月 16 日～2002 年 11 月まで、最初の放送期間は、『核心日文』の内容に従って初級の内容を放送した。内容の詳細は、以下のとおりである⁵。

⁵ なお、淡江大学日文学系『核心日文』の教材製作についてはそれぞれ 1998 年 12 月に『高中第二外語教学

表2 「早安日語」段階別 I 日本語入門の内容

教材名 内容	教材・淡江大学「核心日文」致良出版社
1 課	1 コソアドことば 2 AはBです（名詞句） 3 AはBですか、Cですか。 4 名詞の名詞
2 課	1 コソアドことば 2 中止法「で」（ですの中止形）
3 課	1 動詞ある・いる（存在、有無） 2 と（助詞 AとB） 3 か（助詞 AかB）
4 課	イ形容詞（連体形・連用形・終止形）
5 課	ナ形容詞（連体形・連用形で終止形です体）
6 課	助詞を+動詞（ます体）
7 課	1 から～まで 2 時間—曜日、～時、～分など
8 課	～たい、ほしい（希望表現）
9 課	動詞のて形（てから、ている、てください）
10 課	1 ～でもいい、～てはいけない、～ておく、～てある 2 そうだ（様態） 3 形容詞（連用形+動詞）
11 課	1 動詞の未然形（～ないでください、～なければならない、～ないほうがいい） 2 ～てしまう

検討会論文集』、1999年3月『日本論叢』第八輯、2001年7月『通識課程中第二外語教材・教法研討会論文集』、2001年9月『第五屆兩岸外語教學研討會論文集』で論じた。

12 課	1 動詞の連体形（連体修飾） 2 形式名詞こと（～は～ことです。～ことができる。～ことがある。）
13 課	1 動詞の連体修飾 2 ～たことがある～たほうがいい 3 比較の助詞 より
14 課	1 ～たり～たりする 2 仮定条件の たらならばと
15 課	1 授受動詞（やりもらい） 2 待遇表現（動詞て+授受動詞）
16 課	1 「～」と思う・言う・考える 2 意志の助動詞 う・よう
17 課	1 受身表現 2 可能表現
18 課	使役表現
19 課	1 敬語表現（尊敬語、謙譲語、丁寧語） 2 ～そうだ（伝聞）
20 課	1 敬語表現（お帰り・ご滞在.../～させていただく～れる（られる） 2 ～ことになる（結果） 3 助動詞ようだ

この段階では、テキストに従い、大学での第二外国語選択者向けの授業に準じた内容で、各科の解説を行った。20 課の内容を 114 回に分けて放送している。

続いて、一時中断があるが、次は、初級から中級への内容を放送した、2002 年 11 月～2003 年 7 月、2004 年 4 月～2005 年 3 月の期間である。

この時期では、第一期の内容に、社会現象、流行、日本の伝統などが盛り込まれた会話文を主軸に、文章まで広げていくことを目標として、『おはよう日本語進階教材』（上）（下）を使用して、2002 年 11 月～2003 年 7 月に『おはよう日本語進階教材』（上）、2004 年 4 月～2005 年 3 月に『おはよう日本語進階教材』（下）を放送した。この期間は、日本語入門から中級にかけての講義内容で、合わせて 217 回分である。

この時期になって、社会教育としてのラジオ放送の役割が次第にはっきり分かってきた。

社会教育は、日本では、以下のように定義されている⁶。

社会教育（しゃかいきょういく）とは、社会において行われる教育のことである。特に学校教育以外の教育で家庭教育を除いたものを指すことが多い。

社会教育法（昭和 24 年法律第 207 号）の第 2 条では、社会教育とは、学校教育法（昭和 22 年法律第 26 号）に基き、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む）をいうとされている。

なお、現在では「社会教育」に換えて「生涯学習」という用語を狭義の同義語として使う場合も多く、近年、行政庁では社会教育を担当する部署名を「生涯学習課」と呼称するケースが増えた。これは社会教育という用語が関係者以外には一般化していないためである。また社会教育法の施行時には想定されていなかった、ボランティア、カルチャーセンター、大学等のオープンカレッジ（公開講座）、放送大学などの様々な「学び」を包括した用語として定着しつつあるためである。

内容の詳細は、下表の通りである。

表 3 「早安日語」段階別 II 「おはよう日本語」進階教材上・下

学習目標	初級終盤から中級への準備段階
教材の構成	<ol style="list-style-type: none"> 1 教材全体は 25 課からなる。 2 「核心日文」の基本文型を中心に発展していく。 3 社会現象、流行、日本の伝統などが盛り込まれた会話文を主軸に、文章まで広げていく。
各課の内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 語彙 2 会話（およそ上下関係、内・外、待遇表現、そして、くだけた言い方なども含まれる） 3 読み物（本文（会話）をめぐる短い文章） 4 文型と表現（タスク練習） 5 文法練習 6 会話練習（モデル会話に倣っての練習） 7 聴解練習（ミニ会話かミニ文章を通じての回答練習）

⁶ フリー百科辞典『Wikipedia』

	8 インターチェンジ（各課の標題にかかわる豆知識）	
各課の標題	（上）	（下）
	1 たこ焼きとお好み焼き	13 梅雨
	2 師走	14 招き猫
	3 少子多犬化	15 七夕
	4 こたつ	16 とんかつ
	5 初詣	17 たぬき
	6 雪	18 地球温暖化
	7 バレンタインデー	19 地震
	8 Eメール	20 盲導犬
	9 ひな祭り	21 紅白歌合戦
	10 レジ袋	22 日本茶
	11 お米	23 アニメ・漫画
	12 メーデー	24 忘年会
		25 東京自由旅行

続いて、第三期は、中級から上級への内容を放送した、昔話を中心とした 2005 年 9 月 2 日からの内容である。中級から新たに始めるという意味で、これまでの講義に一区切りをつけて「1 講」から始めることにした。各課の本文（昔話）はそれぞれ『日本のお話 100 有名な昔話・各地の昔話』フレーベル館、『続 日本のお話 100 有名な昔話・各地の昔話』フレーベル館、『親と子の読み聞かせ 昔話 100 話』主婦と生活社、『日本の神話と伝説』謝良宋=『古今著聞集』巻 8・『十訓抄』巻 6、『日本書紀』・『丹後国風土記』、山口県の伝説・小泉八雲『怪談』、『説経浄瑠璃』・森鷗外著『山椒大夫』などから

25 篇選び出し、もっと読みやすく書き直したものである。

具体的な内容は以下のとおりである。

表 4 「早安日語」段階別Ⅲ「おもしろい昔話」上・下

学習目標	日本語能力検定試験 2 級から 1 級のレベルに相当	
教材の構成	1 教材全体は 25 課からなる。 2 昔話を中心に文章の形へ発展していく。	
各課の内容	1 本文（昔話） 2 語彙 3 文型練習 4 聴解練習（既習文型、慣用語そしてことわざなどを用いて会話文や短い文章を作成し、学習者に問いかける練習） 5 ことわざ（該当昔話の内容に出たことばを連想し、発展したりするもの） 6 豆知識（本文にかかわりのある歴史、出所などを知識の補強のために設けている）	
各課の標題	（上） 1 つかずの鐘 2 貧乏万歳 3 ネズミの一番乗り 4 黒くなったカラス 5 一枚のうろこ 6 一寸法師 7 サルカニ合戦 8 けちんぼうの虫歯 9 養老の滝 10 浦島太郎 11 羽衣	（下） 14 言い間違えた豆まき 15 うその虎の巻 16 意地悪ばあさん 17 なくて七癖 18 欲張りばあさん 19 クラゲの骨なし 20 ネズミのすもう 21 合わせて七十 22 河童の話 23 かちかち山 24 耳なし芳一

	12 かみがないところ 13 すずめのひょうたん	25 安寿と厨子王
--	-----------------------------	-----------

2.3 教授方法

前にも述べたように、ラジオ講座はまるで一人芝居を演ずるようなものだというステレオタイプ化されたイメージがある。たしかに、筆者が番組に出るとき、学習者のニーズや学習目的などは、ぜんぜん見当がつかず、どのようにしたら、おもしろい講義ができ、リスナーをひきつけることができるのか、頭を悩ました。また、学習者に対する拘束力がまったく欠如している放送教育だからこそ、工夫に工夫を重ねる必要性がいっそう高まってくるのではないかという問題もあった。普通、教室活動での学生と教師とのインターアクションは欠かせないものだと教授法で求められている点が、電波を通して可能であろうかと苦慮した。そして、また能率のよい学習をするために時間の割り当てをどうすればよいのかも考えた。

2.3.1 ニーズに合わせて

こうした中で、試行錯誤を繰り返しながら歩みだしたのである。もともと成人教育向けの講座であると定義していたので、「核心日文」の段階では、一定の時間範囲内ではっきりとした学習目標を達成するという、がちがちの「目標型」の授業ではなかった。講義の内容に追いつけなくなり、途中であきらめてしまう学習者はたいへん多い。そのような学習者が多数に上ると、学習者の数はピラミッドのように急速に減っていつてしまう。そのような事態を避けようと常に配慮していたのである。

時間割としては、「核心日文」が始まったとき、月水金が予定の講義内容の放送で、火木日の三日間が復習の意味合いで再放送するというようになった。そして、土曜日は生放送の形をとって、コールイン電話を聞きながらリスナーとのコミュニケーションをするようにした。この方法で、今現在も続けている。

月の終わりは講義なしで、各分野における専門知識をお持ちの先生方や、留学にいらっしやった日本の学生などをゲストとしてスタジオに来ていただき、文化、文学、通訳、習慣、流行などなど、広範囲にわたっての対談を行っている。

表 5 放送日程

曜日	月	火	水	木	金	土	日
----	---	---	---	---	---	---	---

内容	新	再	新	再	新	生	再
----	---	---	---	---	---	---	---

第二期の「中級進階」に入ったところでは、今までの授業内容を反省したうえで、日本語教育の概念を少しずつコースに取り入れることにした。課題達成能力を養うためである。「中級進階」のテキストを作成するとき、日本語能力検定には四段階測定がある。その四段階測定の3級からやや上の2級への間にスポットを当てて学習目標を置いた。能力テストとはいうものの、表現力をポイントとした教育を心がけ、学習者に日本語を使って自己表現力を持たせるようにするという目的のためである。これもまさに一つの挑戦である。まず教師自身がチェンジする柔軟性が必要である。具体的には、教師のあり方はどうであるべきかと内省をすると同時に、学習者をリソースとし、それを自分の行動様式に反映したうえで、学習者中心の講義をするということが必要なのだと筆者は感じている。

実は、第二期の「中級進階」が始まったとき、初級段階における文型中心の講義からいきなり「テーマ型」会話⁷、ないし文章になってしまったので、とまどっているリスナーが多いことがお互いのコミュニケーション⁸を通してわかった。それゆえ、少しペースを落として、ゆっくりと繰り返す講義に戻したら、今度は、何とかついてこられるようになったようだ。やはり、電波教室と学校教室とは違ったものだということを再び実感した。又、教師の機動的な応変もいかに大切なものであるかということも同時に思った。

「中級進階」が終わる時点で、講座を続けようとやめようと躊躇ったが、結局リスナーからの要望に応じて「中級進階」のあとに続く内容を設けることにした。物語の多様性に富んだ特色を生かす文章中心の学習を目標にして、「おもしろい昔話」と名づけた日本語能力検定の2級から1級に当たるレベルの講義である。

「中級進階」が終わってから「おもしろい昔話（上）」テキストが完成するまでの約半年間（2005年3月～9月）、土曜の生放送以外は、すべて再放送とした。

2.3.2 リスナーを惹き付ける工夫

以上述べてきた、いずれの段階においてもテキストの内容以外に、気分転換として講義の途中か終わりごろに日本語の歌を流すことにしている。ただCDを流しっぱなしにするだけではなく、その日の講義内容やムードなどに合わせて事前に歌を選択し、歌手の名前、

⁷筆者の呼び方。「中級進階」はテーマ別に会話の進行を中心に作った。

⁸土曜の生放送の時間にコールイン電話したり、手紙書いたりする。

背景と一部の歌詞も含めて簡単に紹介する。つまり、従来のラジオ講座の型を打破して、堅苦しい勉強だけではなく、誰にでも親しまれるような言語学習にしようとしたのである。結果から見てみると、朝 6 時からの放送で、学習者が時間通りに起きて勉強できているのも歌によるところが大きい。ラジオ放送のメリットといえば、まさにこういった自由可変性にあるのではないだろうかと思う。学校教育ではさまざまな制限があり、楽しく勉強する環境作りはなかなか容易ではない。しかし、社会教育では、むしろ「楽しく学習を続ける」ことを中心に学習を組織する必要がある大きい。

3 ラジオ放送の現場での社会教育としての日本語教育

3.1 学習者の自己教育

形を超えた放送教育は、学習者の自主性が高いということが目立っている。学習者の自己教育力が強いということである。それは型にはまっている学校教育と比べると差が大きい。前に述べたように、教師側と学習側とが、お互いにまったく拘束力のない中で、学習者が自分なりの学習目標を立て、人並み以上の持続力を持っていないと勉強し続けることができない。学習の途中で、躓いたら自分で積極的にクリアするほかに方法はない。

「早安日語」のリスナーを例にしてみると、ラジオ講座に学ぶ以外に、テキストに出た文法上の質問や、分からないところなどにぶつかったような時、熱心に手紙を書いたり、生放送の時間に電話したりして回答を求めている。また、リスナーの間ではコンピューターを利用してお互いにネットワークを作って、教師が側にいないときも随時勉強できるようにしている。こういった学習者の姿に感動する一方、学校教育に戻って考えてみると、教師側が一生懸命学生を引きつけようとするにもかかわらず、学生側は全く興味を示していないような、そんな姿を見ると感慨深くなるのである。学習意欲というものは成人教育と学校教育では、こんなに開きが大きいのだということに驚いた。本来、教育において言えば、空間や時間、人員そしてリソースなど各方面にわたって、学校教育の方が優勢を示している。が、その裏腹に、学生の学習意欲の低下、あまりにも保守的な行動力に啞然とする。いかにして、学生に自己教育力の不備な状態を改善させていけばいいのかは、教師としての難問であり、責任であると常に考えている。

3.2 教師のあり方

ラジオ講座に出てから、広範囲にわたる色々な学習者に接してきて、教師というものはどう位置づけられるべきかということをしみじみ感じさせられた。

「早安日語」は、生放送の時間が設けられたお陰で、学習者のニーズをその場で知ることができ、教師は適切な行動にすぐ調整することもできるのである。学習者側にとっては、教師とコミュニケーションができるので、単なる機械にしたがう共鳴のない自学ではなく、ダイナミックに生き生きとした勉強をすることができるといことも生放送の不思議な力であろう（確かに、これは筆者がその当初思いもかけなかったことである）。

一方、こういった学習者に応えられるような教師の心得は何であろうかという、まずは放送という仕事に対する「情熱」を持つことである。教師の明るい、暖かい心が声でリスナーに届くと同時に教師自身の支えにもなると思う。心があるからこそ、積極的に仕事をする原動力が生まれる。また、学習者はいつ、どんな質問、疑問を持っているかわからない。答えられない質問を投げかけられたら教師はどうするべきかと考えたら、正直に対処するほかないと思う。要するに、すぐに答えられない場合、そのあと、確実に問題を解決することが大切である。できなくて恥ずかしいから、ごまかして済ませてしまうということではない。学校教育においても、放送教育においても、「責任感」を持つ教師が望ましい。学習者にとっても、専門性以外に、より人間性を有する教師の姿がありがたいのではないかとすることを現場教師は深く考えていかなくてはならないのではないだろうか。

3.3 学習効果

社会教育の一環としての放送教育では、一般教育のように学習効果を確認するためのテストはもちろんすることは不可能で、個々の勉強の進み具合でさえ、知ることは不可能である。「早安日語」の場合は、いままで述べてきたように、しかし、リスナーからの反応を見てみると、初級から現時点まで3年あまりの講座で学んできた学習者が結構多いようである。人数の統計は無理なため実際にしたことはないのだが、生放送中のリスナーからの電話や、膨大な量の手紙やファックスなどにより、だいたいわかるのである。中でも、再放送することをきっかけに途中に加わったメンバーも多い。そういうところから見ると、これといった学習効果がすぐさま見えなくても、自分のペースで、たゆまずに勉強が続けられるというのも放送教育のひとつのいい点であるといえよう。ゼロからスタートして、日本語能力検定試験2級に受かった学習者がいることが、2005年の合格発表でわかった。その上、1級を目指して頑張っているというリスナーからの便りもしばしばある。これらからも、たゆまずに勉強を続けてこられた結果が見てわかるだろう。

ここで、リスナーの中から、もう一つ学習例を挙げる。日本語を書く力はほぼ完璧に近いリスナーのことである。小学校の数年間、日本語教育を受けた年配の方で、日本語は母語のように駆使できるが、発音や文法のほうがどうも気になったようで、日本語講座を聞いて

て、多少とも役に立ったという。が、なんと言っても、ラジオで親近感がある日本語を聞きながら日本の懐メロも楽しめるのは、何よりだというのである。これもまさに、放送を通しての成人教育の意外な効果ではないだろうか。

こうしたリスナーの例は、まさに、以下の定義のような、社会教育の一環としての生涯教育にふさわしい役割を、ラジオでの日本語教育が果たしていることを示している。

生涯学習（しょうがいがくしゅう）とは、ユネスコ（UNESCO）のポール・ラングラン（Paul Lengrand）が 1965 年に初めて提唱したもので、本来は life-long education、すなわち生涯教育といわれた。日本では、心理学者の波多野完治が、それを受けてこの概念の日本への紹介で功績があった。

人は、学校教育に限らず、社会や職場においても、また家庭に専業主婦としていても、また社会の第一線から退いても、自分のキャリアを切り開いたり（キャリアアップ）、また趣味や楽しみの糧として、はたまたライフワークとして何かを学び続けたり、ボランティアとして地域社会や特定のニーズを抱えた人たちのためにサービスを提供するために、継続して学習を通して自分を高めて行くことが不可欠であるという考え方。近年の日本では大学の社会人入学制度などを利用しキャリアアップを図ることなどが、生涯学習の例として目立ってきている。日本では、社会人入学制度は女性が利用する例が多く、男性の利用に対する偏見が残っているとの指摘もある⁹。

台湾でも、社会教育、生涯教育の役割が評価され、「社区大学」が開講されているが、ラジオ放送での日本語教育もその重要な一翼を担っていることは、明かと言えよう。

4. おわりに

社会教育、成人教育、生涯教育が盛んになってきた昨今、台湾での日本ブームと言う社会現象により日本語の学習は他よりもひときわ目立ってきている。正規教育の学校では、第二外国語としての学習もあれば、夜間コース（「推广部」「在职班」など）で、日本語を専攻とするシステムも設けられている。正規教育以外に、塾やラジオ、テレビを通しての放送教育も、雨後の筍のように立ち並んでいる。こういった学習雰囲気の中、学習者も実にバリエーションに富んでいる。

堀越他（2005.3）の日本語学習動機調査¹⁰ではこうした学習動機の多様性が、6

⁹ フリー百科辞典『Wikipedia』

¹⁰ 第 1 因子「日本人及び日本文化理解志向」、第 2 因子「大衆文化接触志向」、第 3 因子「交流志向」、

因子として抽出し分析された。調査対象は台湾の北・中部の大学 8 校の夜間コースで日本語を専攻する学習者に限られてはいるが、調査された六つの志向の内訳をみると、大半の学習者の赴きを反映していると思う。

各教育機関が学習の場を提供するだけでなく、それとともに、学習効果をあげるための教授法もいろいろ工夫している。筆者がラジオ講座に出ることをきっかけに、成人教育の役割を真剣に考えるようになった一方、従来の教師のあり方も深く反省し、見直した。特に、教師というものは学習者に勉強させるという存在ではなく、学習者に日本語を通して自己実現ができるようにさせるという立場にあるのである。つまり、学習者を導く力が身につけている教師でなければならないというのである。それこそ自然な教師の姿であろうと思う。

学習者の勉強振りから見ると、「ラジオ日本語講座」の学習者が高い自主性を見せている反面、学校教育を受ける学生にはいっさい見えず、自立性にはかなり乏しい状態である。学習意欲に影響する要因が多いので、この点については、次の機会に譲って、本稿では論じない。但し、一つだけ、気になっており、何とかならないかと思っていることがある。前に述べたが、ラジオ放送は、時間、空間、そして費用において、利便性の高い学習方法である。しかし、いかにして、放送教育を最大限に広げて、社会教育の中で、学習力をアップさせていくべきかは問題である。

ちなみに、ラジオ日本語講座を始めて以来、現段階において、筆者のぶつかった難点に触れたい。

- ①教材製作に当たっての編集グループがほしい—みんなの知恵を絞り、チームワークを生かし、講座内容および到達目標を明確に示し、筋の通ったシリーズ教材を作り上げることができるような編集グループが望ましい。
- ②事務的なことを手伝ってくれるアシスタントが必要—ラジオ放送を通しての教育であるので、リスナーの要求に応えていかなくてはならない。ところが、学習者は学校のクラスのように人数が一定ではない。頻繁に送られてくる手紙や、Eメール、また難問奇問には、教師一人では、対応が難しい。
- ③著作権の問題—「早安日語」は、教授内容に合わせて、日本の歌や音楽を番組内で流している。放送局から放送料を払った法律上使用できる日本の音楽はわずか

なものである。仕方なく、筆者が自腹で必要な C D を台湾か日本で購入している。但し、これら C D の放送権をすべて取得するまでには至難なことである。これは現実と理想との両立できない最大の悩みでもある。

社会教育として、さらなる充実を図るには、以上のような問題に対して行政面での支援が必要であろう。

ラジオ放送教育は社会教育、成人教育の一環として、問題の多いものであっても、読者からの多数の反響から見て、最も気軽に利用でき、効率的な学習方法であることは間違いないと思われる。また、社会教育の一環として既成のシステムと結びつけ、整った教育環境を築きあげていくことを今後の課題としたい。

（本稿は 2005 年 11 月「淡江姉妹校外語教学国際学術検討会」にて口頭発表したものを加筆訂正したものである。）

本論文於 2006 年 7 月 28 日通過審查。

参考・引用文献

- 青木直子他（2001）『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- 石田敏子 『改定新版・日本語教授法』 大修館書店 2000
- 今西幸蔵／村井茂（2006）『現代における社会教育の課題』八千代出版
- 上条純恵 「普通高校における第二外国語としての日本語教育の歩
『いろは』19（財）交流協会日本語センター 2005
- 川口義一／横溝紳一郎(2005)『成長する教師のための日本語教育ガイドブック』ひつじ
書房
- 蔡茂豊 『台湾日本語教育の史的研究』上・下 大新書局 2003
- 鈴木真理／松岡廣路（2006）『社会教育の基礎』学文社
- 孫寅華 「大學第二外国語としての日本語教授－教材製作を通して反省させら
れたこと」 『淡江日本論叢』8 1999
- 孫寅華 「日本語教育の場に見られる日本語・中国語の誤用－教室活動から見た
言語慣習をめぐって」『淡江日本論叢』10 2001
- 中尾真樹 「台湾における日本語関連の大学院 2－夜間社会人コース（碩士在
職専班）」『いろは』20（財）交流協会日本語センター 2005
- 堀越和男・武下志保子 「社会人のための日本語学習－大学レベルでの教育システム
と学習動機」（2）『いろは』18（財）交流協会日本語センター 2005